
死神は優しく唄う

幾夜 憂生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神は優しく唄う

【Nコード】

N5079B

【作者名】

幾夜 憂生

【あらすじ】

“死”に対して思いを巡らす人々にどんな歌を唄ってやろうか。

…アンタ達はどんなの歌がお好みかな？

〈御園鈴の場合1〉

別に彼女はイジメで死ぬほど辛い目に合わされたわけではない。恋人に振られての傷心からくる願望でもない。まあ、恋人が出来るほどの器量はない、と言うのが正しいがそれもあまり関係ない。ただ単に、“生”に対する執着が無く、故に死に対する恐怖はあまりにも薄かった。

ただなんとなく、今のまま、完成状態で終わるのも一興かな、と思っただのだ。

四、五階程度の建物での飛び降りは無様に生き残る可能性がある。と知る彼女。

そんなわけで二十階もある高層ビルを選び、その屋上の縁でただ一人風に身をまかせていた。

意識的ではなく、あからさまにではなく、自然に、何気なく下を見下ろす。

地球の引力に吸い込まれそんな錯覚と酩酊感を覚えるが、不思議と恐怖感は無かった。

『ん……さてどうしたものか。お前さん自殺すんの？』

彼女以外誰もいないこの屋上に、不意に明後日の方から浸透感のある中性的な声が響く。

その声の主を見つけようと彼女は辺りを見渡すがやはり誰もいない。

「……ただの幻聴かな」

自分が出した幻聴という答えに納得したのか、彼女の意識は当面の目標に戻っていく。

深呼吸一つ。そして履いていたローファーを片足づつ丁寧に脱ぎ、綺麗に並べる。

この行為にも意味はない。自殺前に靴と遺書を揃える、という日本に浸透している行為を思い出しただけにすぎない。

ただし彼女は遺書までは用意しなかった。世界に言い残す言葉は微塵もないのだから靴を揃えるという行為だけで事足りた。

『いや、待って』

またも声が響く。

間違いない彼女以外の存在が在ることを証明する声。

やや困惑しながら辺りを見渡すが、周囲には誰もいない。

「いや、上も見るって」

「!?!」

思わず体が固まり驚きの声さえ出なくなる。それも当たり前だった。鉄の塊が空を飛ぶならいざ知らず、生身の肉体が何の機械も無くホバリング　空中停止ができるわけ無いからだ。

「っ……………舞空術？」

ボソリと呟いたそのあまりにも間抜けなボケに、彼は器用にも空中でズッコケてみせるという妙技を披露した。

「いやいや…人の死、黒い衣裳、あまりにもありえない状態、と言えはわかるだろーが」

「まさか……………死神？」

「正解正解 非常に物分かりのいい娘だねえ。」

その彼の軽い発言に対して彼女は目を細めた。

それもそのはず、幾ら黒い衣裳といってもこのイケイケな 胸には髑髏をあしらったペンダントトップ。黒のインナーの上に黒のライダーズジャケットを羽織り、黒のジーンズを穿きこなすといった衣裳 格好から死神を連想しろ、と言うのは少しばかり無理がある。

「まさかと思うけど…フード付きの黒いローブを身に纏って、髑髏の仮面を被りつつ大鎌を振るう姿を期待してたかい？」

「…うん」

『……………』

しばし静寂が二人の間を支配する。

唐突に、彼は清々しい程の笑みを浮かべ 爆笑した。

「っはっは!!っくっく…今時そんなベタな格好で…っくっく…更に“黒色”を選ぶやつなんざ死神界の絶滅危惧種だっつもの!!っはっはっは!」

ふと、彼女の頭に疑念がよぎる。彼は先程なんと言ったか?確かに“人の死、黒の衣裳…”が死神”と言ったはずである。そうなる導きだされる答えは只一つだ。

「つまりあなたが絶滅危惧種で、嚴重管理課の下において保護されるべき貴重素体…というわけ？」

死神に対して臆することもなく冷ややかな眼差しを送りながら、尚も的確に言葉を発する彼女には間違いなくツッコミの属性が付加されていた。

「がつ！？お前：御園鈴くみそのすず>ってやつは嫌な女だな。細けえ事覚えてやがる」

「ふん。“死”を食い物にする死神が人を“嫌な奴”だなんて……世も末ね」

あまりのことに絶句し、しばし放心してから彼は言い放つ。

「知らんのか？死神は慈愛に満ちた神様なんだぜ？俺等の顔見るたび不幸だと人は口を揃えるが、言っちゃえば俺等は四つ葉のクローバーだぜ？むしろ俺らに遭遇せず、死天使に葬送されるほうがよっぽど不幸ダッツの！」

らしくない格好で、軽めな発言で言われてもいまいちピンと来ない。大体私は死ぬんだと、邪魔しないで欲しいと鈴は心底思った。

「まあいいさ。死ぬ前にいーもん見せてやる」

彼女の腕を強めの握力でグツと握り締めて、空に躍り出る。彼女は彼女をどこに連れていこうというのか。

二人の体は水中を泳ぐように、空に放たれた。

いやだから、死なせてよ???

そんな彼女の思いもどこ吹く風、彼はさらりと自分をアピールする。

「ああ、自己紹介が未だだったな。俺は俺の名はゼロ、しばしの間よろしくな」

く御園鈴の場合2く

体を撫でゆく風が気持ちいい。

遙か高い場所から地上を眺める気分は最高で、世界を掌握したような感覚を彼女は覚える。

「ふはは。人がまるでノミのようだ」

気持ちが高揚する事象のなかにいたとしても、ゼロの一字違いなニアミス発言による不快感と、腕を引っ張られる痛みには勝てず現実に引き戻される。

「ノミとかそうそう見えないし……それよか腕痛い……で私をどこに連れてゆくワケ？」

明らかに嫌そうな顔をしながらゼロを睨めつける。常人なら恐怖し、戦き、罪悪感に苛まれーはしないがとりあえず謝りたくなるその視線だが、死神という人外な存在の彼は微塵も臆せず彼女に言い放つ。

「…鈴の友達に会わせてやんのさ。この俺に感謝しろよ？ああ…慈愛の神である死神の俺様ってバファリンの半分だけでできてるんじゃないの？」

どう考えても好奇心と霊的エネルギーだけで存在してるんじゃないかと、バファリンの半分だけでまともな思考ができるのか？とか幾多もの無粋な突っ込みが頭をよぎるが、『友達』という単語に鈴は困惑していたのでその言葉は吐き出されなかった。

……実に惜しい。

友達なんて作ったつもりも無いし、欲しいとも思わない。いればそこそ利用できるが深入りすると苛立ちの原因になる、そして何よりもだれにでもにこと表情を振る舞う自分が嫌いだった。だからツンツンとした態度をとり、誰も寄せ付けないようにしてきたのに。誰だろう？今更私を友達という存在は？

彼女の困惑の表情を十分堪能してからゼロは喋りだす。

「ほら、あの娘だよ…なんてったっけか…ああ…東雲明菜くしのめめいな>ちゃんだっけか？やたらテンション高いポジティブガール。俺のストライクゾーンと真ん中ドンピシャリだぜ??」

後半の情報はあまりにも余計だった。友達と思っていないなくても、ゼロに好かれてる事についてほんのり同情を覚えたような気がする。

(明菜がかわいそうだ。…：：：襲われないかな?)

「おい鈴リン」

迷惑甚だしい呼称でゼロが呼びかける。あだ名のネーミングセンスも”ゼロ”らしい。

「な…何？」

「今すつげえ失礼な事考えなかつたか??」

妙に勘が冴えているな、さすが死神。

などと思いつつポーカーフェイスを作り上げる。

思考を読まれるのは嫌いだ。手のひらの上で踊らされているような気がしてくる。

「そんなことないわよ?」

さりげなく、平静に、あくまでも自然に、動揺を声帯に伝わらせないように、言の葉を紡ぐ。

バレたって構わないのだが、笑顔を作るゼロの目はほんのり座っていた。

「そ…そんなことよりも、明菜に会わせるんでしょ?早く連れて行きなさいってば」

「やんやんやんや言いなさんな。もうすぐ着くつて。ほら…後二百メートル…百五十…百…」

やたらじらす彼。やはり、好奇心半分面白半分で鈴を連れ回している事は明白だった。

後の祭り。

後悔先に立たず。

自分死ぬんじゃないかったっけ?

何だこれは?

どんな形だろうと死神に遭遇するのは死の前兆じゃないのか?

ああ、頭痛い

「ほら。ここが明菜ちゃんの部屋だぜ?」

鈴に遠慮なく、明菜の部屋の窓に連れてくる。がさごと人が動く気配と部屋から推察すれば、それは間違いなく明菜そのものである。

「そついや、中学まで皆勤だった鈴リンは一週間前からプツツリ学校行かなくなったらしいじゃネエか。何それ？死ぬ前の一準備ってか？」

唐突にゼロは鈴に話しかける。

(だから鈴リン言うな)

「別にいいじゃないさ。死ぬんだから皆勤なんて意味ないし。いきなり来なくなっただって誰も不審には思わないわよ。それに学校もいしかげん飽きてきたワケ。みんな学校に行くから、だとか主体性の無い目的だけで授業受けても意味ないでしょう？それに……私一人消失したところで世界は何も変わらないの。私一人対した影響力はないのよ」

全て吹っ切れたかのごとく、軽やかに、イヤミも無く、驕りもせず、彼女の言葉が宙を舞う。

「ふうん……てめえ一人欠けたところで何も変わらない……か、言うねえ。……その窓から部屋を覗いてみな？」

「……明菜に見つかるでしょう？少しは考えなさいよ」

「それはこつちの台詞だな。今更だが何故、人が空飛んでるのを見て誰も騒がない？しかも、いくら家の中にいる明菜といえ、この距

離の俺らのこの声ぐらい聞こえるはずだろっ？」

「え……それは……」

刹那、鈴の思考が固まる。

「簡単な話、死神に接触してるやつはこの世界の生き物に”認知”
されないのさ。ドゥユーアンドンダスタン??」

「……」

「だから誰にも気兼ねなく覗けばいい。そして知れ、自分がどれだ
け小さいかをー」

く御園鈴の場合く

彼女はどこか哀しそうな瞳でどこか遠くを見つめていた。ふとすれば鈴に視線が合いそうな気もしたがそれはない。今は世界の影響下には無いのだから。

ブラウン管越しにアイドルを注視しても、どんなに想いを馳せても決して届かないのと似たような状態。位相のずれた世界から世界を傍観するのと同じだった。

「ねえ、これが明菜なの？いつもはあんなに明るく元気なのに…っけんどんに相手にしてもめげない子なのにな？」

何か思う節があるのか、だんだんと鈴の顔のかけりが見える。目の間に在るその姿は、あまりにも大人しく映る。

ジブンのセイジヤナイ。

ワタシハヒトリデイインダヨ。

「人前に出している顔と本当の顔は同じじゃないってことだ。……ショックだったんだろーぜ？ガッコにこなくなっただけ、お前とまったく連絡が取れなくなっただけが…。」

それでも一歩外に出ればこいつは人のために、自分を励ますために馬鹿をやるんだよ」

ゼロの言葉は思いのほか深く深く心にしみて、鈴の心を揺り動かす。

「たかが一つ、鈴の命が消えた位で世界は変わらないし変わらないさ。お前がつまらない理由で死ぬか、死なないか、そんなことは実

のところどつでもいい」

「え……」

「けどな、お前を知ってる奴関わりたいと思う奴にとっての世界は、その”死”であまりにも呆気なく変化するのさ」

ワタシガカエテシマッタノカ？

アノ明菜ヲウバツテシマッタノカ？

ナンデ？

サイシヨカラワタシハサメテイタジャナイカ。

カッテニチカヅイテキテコワレナイデヨ。

思考がまとまらない。

何度も何度も同じ所をリフレインして気分は果てしなく最悪の状態に陥る。

「なあ、鈴。どうすんだ？これでもまだ、『ツマラナイ』そんなくだらない理由で世界から消えてゆくのか？」

「でも…私は……私は……」

今更顔を合わせられないよと、悲痛な叫びで胸がいつぱいになる。

「『ツマラナイ』ならさあ…目標がないなら…明菜のために生きてみればいいんじゃない？」

どこことなくゼロの口調が優しく感じられた。

ゼロのおかげで何かが見つかりそうになってくる。

ほんのり涙を浮かべた鈴の瞳には、僅かだが力が戻ってきている

のがわかる。

「ふん…いやな奴ね。最初から、みすみす私を死なせるつもりなんてなかったんでしょう？死神の癖に…」

いつの間にか完全に活力が戻ったようで、憎まれ口も復活する。

「クク…：言つたらうが…：死神は“慈愛の神”だとな。」

言いながら、ゼロは優しく笑う。最初に見られたあの軽い印象は何処吹く風である。

死を司りながらも慈愛に溢れた存在“死神”。いや、むしろ慈愛に満ちてるからこそ死を司ることができるのではないかと感じる。

「さあ、自分がどうするかとかどうやら思考が固まったみたいだからな。ゲームはすでにラストステージ一歩前だ。」

「うん」

「んで、俺のお役目終了ってわけだ。」

地上に降り立った彼の姿は、彼の輪郭はぼやけていく。元ある世界に戻っていくのであろうか。

「フフ、次会う時は寿命を全うしたときかしら？」

「だな。というかできればもう会いたくねえな。アハハハハ…。」

「

朗らかな笑い声とともに、完全に視界から消えつせる。
後に残るのはすべてを包む優しい日の光と、緑の匂いを運ぶ一陣
の風だけだった

く御園鈴の場合4く

インターホンのプッシュボタンに置かれたその指には、少しばかりの震えが現れている。

若干の葛藤の後、意を決して彼女はプッシュボタンを押した。

ピンポーン

『はぁい？どちらさまですか？』

元気のない声が、インターホンを通じ鈴の耳に届く。

「御園ですけども…」

『えーうそ…！！鈴…ちゃんなの！？ちょっと…待ってて！！わわわっ…！！』

間髪いれず明菜の声が返ってくる。その声は、心なしか動揺を表しているように思える。

バタバタ…ダドン…！！

何かが…いや、明菜が倒れる音が家中に響く。どうやら確実に動揺しているようだ。

カチャン。

ロックが外れる音がして、間もなく扉が開く。

「あ……………」

どのような言葉を掛けようかと戸惑いの表情を浮かべる鈴。しかし、その一瞬、明菜は言葉よりも早く、風より早く、光のように優しく鈴に抱きついていた。

明菜は、涙が流れる今の表情を読み取られまいと顔をうずめる。

「う…………ぐす…心配…ひつく…して…してたん…ぐす…だよ…」

「…ごめんね」

「いきなり…こなくなるんだもん…ぐす…」

「…………ごめんね」

泣きじゃくる明菜をみて、罪悪感を覚える彼女。そして自分の“影響力”がどれほどのものを彼女は実感した。

「なんで…………そんなに心配してくれるの?…なんでそんなに私を…」

言い終わる前に、明菜が言葉を言葉で遮る。

「だって…うつ…いつも…鈴ちゃん、いつも一人で寂しそうだったから…」

『寂しそう』その単語に、鈴は僅かながら衝撃を覚えた。

トオザケテイタノニ?

ワタシガ?

サミシカッタ???

「ねえ……いつも仏頂面な私の傍にいて…拒絶されて…それでもいてくれるのは……」

鈴のそういう言葉を聞きたくないのか、またも言葉を遮られる。

「私と…ぐす…似ていたから…家にいて…親にかまってほしいのに…孤独を演出する私に…似ていたから」

そんな事実を、いつも明るい明菜の事情を今明かされて、鈴は死神の言葉を思い出す。

『人前に出している顔と本当の顔は同じじゃないってことだ』

そう。きっと鈴自身も無意識に感じている孤独を、寂しさを、拒否という形で表していたのかもしれない。

他人を自身に重ね、他人を救おうとする明菜。

他人を自身に重ね、なお拒否しようとする鈴。

関与しようとする者

傍観しようとする者

「けど…それ以上に…ぐす…知りたくて…仲良く…ひつく…なりたかったから…うう…来なくなったときは…死んじやったのかと思っ
て…」

「…ホントごめんね。心配させて」

両腕で彼女を優しく包み込む。いつも明るく丈夫そうな明菜、し

かし相反する壊れそうなくらい繊細な心も鈴は包み込む。

「…友達で…いてくれるよね？」

明菜は恐る恐る確かめるように、鈴の顔を見ながら問いかける。

「当たり前でしょ。私は…本当は…明菜に憧れていたんだから。天真爛漫で、明るく活発な明菜に」

これは嘘偽りのない本心だった。

今まで隠していた気持ちを始めて出した瞬間、明菜の泣き顔に笑みが戻る。

「そ…それホントかな？あ…あはは！て…照れちゃうな。鈴ちゃんにそんな事…いつてもらえるなんて」

涙が流れた跡が光るその笑顔の中に、少し赤みがかかる。

「えつと友達でいいんだよね？」

「うん…あ、ねえ。私が考えた鈴ちゃんのあだ名があるんだけどそれで呼んじゃっていい？」

涙したことを忘れたかのごとく、太陽のように輝くその笑顔で、屈託のないその笑顔で問いかける。

「うん、いいよ。どんなあだ名かな？」

嬉しさ半分、妙にやな気持ち半分で明菜の言葉を待つ。

「鈴リンなんだけど…どうかな？」

！！

それは何だか衝撃的だった。衝撃的すぎて、妙な勘繰りをしてしまっ
まう鈴がそこにいた。

「あ…あはは。…（まさかヤツの入れ知恵…とか？まさかね）…い
いわね、それ。じゃあ、明菜は…メイって呼んじゃおうかな」

ほんの少し、優しい風が吹いた気がした。

「ふふふ。よろしくね、鈴リン」

「よろしく、メイ」

もう自分は一人じゃないと、必要としてくれる人がいるという思い
で、自然に笑顔がこぼれていく二人。そんな二人のこれからを暗示
するかのように、日差しは強くなっていく。

そんな二人を見守る影が一つ、電柱の上に身を潜めていた。

「ふ、In the case of Suzu Misono
……“Happy end”ってか」

〜御園鈴の場合4〜（後書き）

N e x t s t a g e

〜音無奏の場合〜

～音無奏の場合～

彼の主治医ははつきりと言わなかった。

彼の主治医は親にだけはつきりと告げた。

ただ彼は自分の状態を理解していた、さほど自分の命は長くはないのだと。そんな身で、彼はこう考える。

命は限りや寿命があつて、たまたま俺は終わりが知らされた、ただのそれだけだ

それだけで、自分の身における出来事は受け入れる事ができ、惨めに泣き喚いたりすることはなかった。

ただ一つ、気がかりがあつた。

数年来も付き合っている彼女のこと。

それが彼にとって唯一の気がかり。

まだこの事を打ち明けておらず、どのように切り出そうか、彼女は泣いてしまうのか、それを知ってもなお笑っていてくれるのだろうか、いろんなことが頭をよぎる。

「はあ……気が重い」

病院の正面玄関を出た場所にある四人掛けベンチに、彼は一人で座り込み、呟いていた。冬の風が肌を刺激していくが、今の心境に比べるとそれは対したものではない。

「ハハ、何にせよ伝えなきゃな」

自嘲気味に笑いながら空を見上げれば、彼の心に反比例するかの如く空は青く澄みきっていた。

ゴオオオオン！

爆音が一つ、現れ出でて轟いた。

『俺様参上！INホスピタルってか！！…アハハハハ！』

存在を主張するような快活な声が、豪快なバイクの音が、突如彼の脳内に響き渡る。

「だれだよかましい！単独行動大好きなローンウルフもといチンピラですか！？」

イヤそんな顔でふと辺りを見渡すと、そいつはいつの間にかそこに存在して　そして、まあなんとというか、軽く挙動不審なソイツと、不覚にも目が合ってしまった。

（あゝヤダヤダ、早く帰ってくれ）

彼のそんなな思いは、虚しく空に霧消する。

なぜか？

答えはシンプルすぎた。…シンプルが故に難しい、という表現があったりなかったりするが（どっちだ）そんな小難しいことは関係ない。

視線があつて、にぱつと微笑みかけられたのだ、旧知の仲のごとく、赤の他人に。

「みい〜つけた！よう、カナツチ！まーた以前よりも、どーしよーもなく爽やか方向へ吹っ切れてね〜か？？」

あまりにも軽いノリで、他人様にとって迷惑なノリで、…いやむしろ、奏は初対面なわけで。

（なんだコイツなれなれしいっ！）

黒いライダーズジャケットを羽織りながらも、胸に光る髑髏のペンドラントトップをいじくる彼。更に黒のインナーと黒のジーンズという、そのファッションセンスはあまりにも 場違い且つダメセンス？と思えるものがあつた。

「は……不吉色一色ヘンタイセンスな人に！知り合いません！
！！」

びしい！と胸の前で、バツの形に腕をクロスさせる。

「な……な……！」

うつすらと青みがかった表情に、内心の揺らぎが垣間見えた。

（おーし、動揺しとる動揺しとる！さっさと帰ってもらおうか！）

奏の期待値は最高値まで上昇する。もっとももっと揺さぶりをかけ

ねばと、思考を巡らせ言葉を生み出そうとしたそのとき

ソイツの膝ががつくり崩れ、オーアールゼットを完全具現化したかのような体勢になった。

「く……俺様が貫くポリシーが…ヘンタイセンス？一般常識？それは初耳だ…」

いったいどこから生まれたそのポリシーは！果てしなく田舎のあのぼりさんか！と、思わず呟いた事を、後に彼は後悔することになる。

「……ふ、イナカだと？俺様の生まれた場所を知って…名を知って恐れ戦くがいい！」

その場ですつくと立ち上がり、芝居がかった陽気な口ぶりで発言する。ときすでに遅し、オカシナヤツと関わり合いになってしまったと、イマサラ後悔。

「クク、俺様は…死神界の最上級…ゼロ様だっつーの」

く音無奏の場合2く

微妙な沈黙が二人の間を流れる。

「はあゝあそうですか死神ですか。そんな設定おもしろくねえからもうちつとひねり加えて出直すんだな自称死神君」

優しい爽やかスマイルひっさげて毒ポロリ。

………猛毒かもしれないとさえ感じる。

「…お…信じる信じないのはお前の自由さ。とりあえず自称死神きどりなゼロ様で話を進めようか。…この俺は知ってるぜ？狂おしいほど愛しくも大切なカノジヨ、四鏡響子くしかがみきようこく>に、まだ自分の体の事を知らせてないことを」

してやったり、とイヤミったらしい笑顔を全開にするゼロ。

奏は平静を保っているつもりらしいが“彼”には小賢しいマネは通じない。先ほどから軽い調子で話しているが、彼の瞳は奏の心を見透かすような強さがあった。

「…どうやって調べたのさ？」

訝しげな表情でじろりと彼を一瞥する奏。

彼はまだゼロの事を信じてはいない。

コイツ八俺ノ事ヲ玩具カナンカト思ツテルダロウ

「悲しいねえ、いつからヒトはそこまで疑り深い存在になったよ？きつと有り得ない事象がおきても精一杯否定するんだろーな。科学

なんて、所詮『仮学』でしかないのにな」

長い時を駆けてきたゼロの脳裏に一つの姿が浮かび、彼にとっては珍しい物憂げな表情を見せる。そして、その顔を見られたくないのかバイクと共にふわりと空に舞う。

そこには、超常現象に対するトリック云々の言葉を、力任せにねじ伏せる圧倒的な説明力があつた。

「ふう…いい加減信じるよ？別にとって食うわけじゃない、お前と…四鏡響子を導きに来ただけさ。…ほら？もうすぐ彼女がお前に会いにやってくるぜ？」

なぜそんなことまでわかる！と口に出しかけた言葉はゼロの姿と共に霧消する。

「…？どこいったよゼロ！響子になんかしたんだろう！？口出しとかしたんだろう！？余計なことをするんじゃないやねえ！！このクズ野郎が！！」

彼は姿が見えないゼロに向かって、奏はありったけの声と怒りをぶつける。

刹那、頭の中に声が響いた

『は。自分でカノジョに会うのをためらうヤツのために、自分で伝える機会があるくせに行動しないヤツのために。わざわざ俺がセツティングしてやったんだ。むしろ感謝してほしいねえ』

姿が見えなくても やはりあのニヤニヤ笑いが脳裏に復元される。

イヤミったらしい。鬱陶しい！

しかし何故こんなにもゼロに怒りを覚えるのか、薄々奏も感じている。

分かっている。

俺は先送りにして逃げただけさ。

心の準備ができてないとか何とかいって、自分をごまかしていただけさ。

だが、そう易々とヤツの思い通りになりたくない！と、詰まらぬプライドが彼の邪魔をする。

『フ、無駄だつつの。俺がカノジヨに“連絡”をして置いたからな。あと、十分くらいでここにつくはずさ。』

「え」

自分の顔が引きつるのがイヤでもわかる。

『精々今のうちに、カクゴと話すコトバを固めておくことだ。それではカナデ君頑張り給え』

声しかないというのに、憎々しいほどの笑顔がリフレインされる。

「ちつくしよ。………やっぱり腹くるしかないか」

彼の顔には複雑そうな表情が貼りついて、尚且つ少しばかりの力クゴが見え隠れしていた

く音無奏の場合く

足取りも軽く、鼻歌なんぞを歌いながら、満面の笑みで、彼女は病院に姿を現わした。

そして、ほどなくして彼女は奏がいることに気付く。

「あ、カナくんホントにいたよ?……やつほく元気?」

傍から見て、明らかに病人のカッコをする奏に「元気?と声をかけるなど言語道断であるが、そこはあまり触れないでやっておいてほしい。なにせ彼女にしてみれば、他人の事を気遣う、その行為自体が珍しいのだから。」

「うるせえよバカタレ」

!

「え、何か言った?」

彼女は目を瞬かせて奏に問いかける。今の発言が少しばかり気になったのだろうと推察できるが、キャラクタがストーリーテラーに対して突っ込むのはいただけない。

「や、こっちの話。創造主に対しての発言だから気にするな。はは

こっち視線はやめなさい。

「そっ?」

何が何だかわからないという表情を彼女は見せるがソレも当たり前だが、その表情もたった一瞬で変わっていった。

「うーみゆ……………で。何か私に用があるんだよね？」

「……………」

にこつと笑いながら、ズバツと核心に触れてくる彼女のその行為は中々に清々しい。清々しすぎて、微塵の悪意さえも感じられないのがすばらしいとさえ思える。

「奏の親愛なる友人ゼ口様” って人から手紙をもらってさ。

『カナくんが響子ちゃんにどうしても伝えたいことがあるんだとさ。だから明日午後三時、琴音病院にいつてやってくれないか』
って」

また余計なことを！と抗議の声が脳裏をかすめるが、実のところそれは余計なことではなく無駄が無いナビゲートだったりするから質が悪い。

「というか、やっぱりカナ君も病気になるんだね？」

「なんだその含みのある言い方は。彼氏に対する発言じゃないだろ」

奏のツツコミに微塵も揺るがない彼女は微笑を一つ返す。

焦らずに、あくまでも自分のペースを保ちながら、確実に核心へと踏み進む彼女。

「そして？カナ君はどんな病気にかかったんだったんだい？響子様の愛で治してしんぜよう」

躊躇いながらも言葉を脳内で構築してゆく。

目の前の笑顔が壊れないように、失われぬないように、コトバを選びながら、確認しながら、全てを伝えてゆく……

「響子？」

「……」

全てを打ち明けられた彼女の顔には、少し寂しげな笑みが浮かんでいた。

「ん、先いつちやうけど……ごめんな。」

いつまでも一緒にいられるわけではないと知っていたし、いつか大切な人の死を見ることがあると知っていた。

だけど　これほど早くに大切な人の終わりを告げるとは、世界はあまりにも無情である。いや、“無情”では無く全てにおいて“公平”なのか。

「……大丈夫…ダイジョブだよっ！それなら、それならさっ！？終

わりまでいーっぱいラブラブしちゃうからねっ！！」

寂しげな笑顔をどこかへと吹き飛ばし、今は無邪気な笑顔に満ち溢れていた。

儂くも短い時間を駆けていく二人は、太陽のヒカリでより一層輝いているように見えた。

く音無奏の場合4く

「よう。なかなかアツアツじゃないか。最後の方とか俺がいること忘れてたる？見せつけてくれるねえくひゅくひゅく。」

響子が帰ってからしばらくして、彼は茶化しの言葉と同時に現れた。

恋人同士の出来事を陰から盗み見するとは人でなしすぎる。

…あれ？死神だから人でなしという表現は効果ないのでは？というツツコミは胸の奥深くにしまっておいて欲しい。

「！！人のキスシーンとか見んじゃねえよマジでヤな死神だな。慈愛の神とかいつてるけどさ、アンタの全ては好奇心でしか構成されてないんじゃないですか？」

ほんのり顔を赤くしながら、実に正鵠を射た発言をする。

「たぶんそれに近いと思うぜ？好奇心とバファリンの半分側でできているのさ！ハハハ」

笑いながらその言葉をあっさりとは許容する彼は、イヤミっただしいあの笑顔を軽薄そうな顔に浮かべていた。

「厄介なヤツだな、まったく。…はあ、またしばらくしたら嫌でも顔を合わすんだろ？……そんなときはアフターケアもしっかり頼むぜ自称慈愛の神様とやら」

どこかスッキリしたような顔で、旧友と言葉を交わすように奏は喋る。

最初嫌がってた相手に対して。

「おうよ任せな？お前がこつち側に来た暁には、カノジヨが来るまでしばらく相手してやるさ」

まるで最初からアフターケアをしてくれるつもりのような口調だった。が、一つの疑問が浮頭にちらついてしょうがない。

やな予感が膨れ上がっていくが思い切って彼は聞いてみることにした。

「さてアンタ…仕事はドウスルンデスカ。ほったらかしですか」

どことなくかた言になっている奏の質問に、待つてましたと言いつうな、他意がありそうな笑顔を浮かべてゆく。

「いや、カナツチの相手をする事、ソレも仕事のうちなのさ。…
というのを建前に、仕事をサボるとというのが本音だったり」

「はは、まったくサイテーじゃないか。ま、よろしく頼むよ」

「おう。こつちに來たら俺様の身の上話からしてやんよ」

ろくでもない話だろうなと思いつながらも、少しばかり楽しみにしている奏。

他愛の無い楽しい話をしていると、やはり時がたつのは早い。すでに日は落ちきって、柔らかい黒が辺りを覆っていた。

「さて、んじゃ俺は先に行つとくぜ。甘々な思い出をしつかり作つて来い」

とその言葉だけを残すとゼロの姿は虚空に溶け始め、やがては闇へと同化していった。

一人立ち尽くす彼は、大人しく院内へと引き返してゆく。

ボタン

正面玄関のドアが閉まる。

「In the case of Kanade Ottonasi
..... True end」
「..... だな」

〜音無奏の場合4〜（後書き）

N e x t s t a g e

〜死神ゼロの場合〜

〜作者の場合〜

憂)

どうもどうも、作者です。

まああれだ、なんて言うか有り難いよね。

こんな作品を読んで頂いて感謝感激雨霰感涙ものです。

ゼロ)

…な？話は手短かにイコーゼ？なんで俺らの会話だけなハナシがあるんだろうな？

作者の力量不足かなあ〜？

憂)

バツ…バカ言うんじゃない！妄想力が加速してお前の話が四話に収まらないだけだって！

鈴)

…それを世間一般では力量不足という。

そもそも…一定数にまとめる必要があるのかと問いたいかも。

憂)

いやね、なんていうかまとまっているとバツと見が綺麗じゃない？

奏)

じゃあいつそのことそれを気にしないでドカーンと大量投稿しちやえば？

憂)

ん〜でもね、ゼロの話はバトルアクションもいれよっかな〜と考え

てるわけでした。
そしてそうなるタイトルイメージから若干ずれるんだよね。

ゼロ)

ふうんなるほど。

書き溜めた(ノートに) 作品を完結させたこと無いから、コレを
取りあえず完結させて番外編扱いで投稿したいわけだな？

憂)

そうそう。

ジャンルもほんのり変わるからね。あまり同一視したくないんだ。

鈴&奏)

∴最初からしっかり構成練れっの！

(三人が作者を取り囲む)

憂)

ん？な∴なんですかね諸君？！

三人)

∴取りあえず∴肅清くらつとけっ！！

(作者軽く袋に)

明)

あれ、なにしてんだろ鈴ちゃん？

響)

きにしちゃダメだよ明菜ちゃん！ホラホラ、脇キャラの私たちが主役とるチャンスだよっ！神様は私たちを見捨てなかつたんだねっ（嬉

明& a m p ; 響)

頑張つて番外編作らせますので数少ない読者の方々様、あつたかい目で待っててやってください。

それでは…番外編にてお待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079b/>

死神は優しく唄う

2010年10月10日21時48分発行